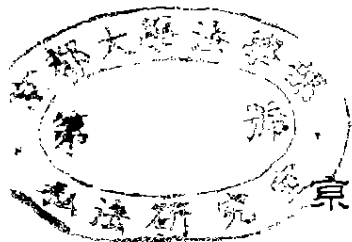


經濟論叢

第八十一卷 第四號

- 資本主義經濟の發展段階……………堀 江 英 一 1
- 創造的世界經濟學の世界史的基礎(二)
……………石 川 興 二 18
- 日本におけるメキシコドルの流入とその功罪(二)
……………小 野 一 一 郎 34
- 技術革新と生産規模……………山 田 保 53
-



昭和三十三年四月

京 郡 大 學 經 濟 學 會

創造的世界經濟学の世界史的基礎 (二)

——自由・平等・博愛の世界經濟学——

石 川 興 二一

三

創造的世界經濟学なるものの課題と論理とを更に明らかにせんがために、人類史の時代的发展的構造に即して課題と論理との發展を全般的に見んに、人類歴史を一貫せる課題は、人類の解放と云うことであり、人類歴史が進展すると云うことは、この解放が徹底し行くことである。この課題を解決する論理は、人間の自覚と云うことであり、人類歴史が發展すると云うことは、この人間の自覚が徹底し行くことである。これまでの歴史を見るに、人間の解放と云うことは、新たな主体が自覚することによって、なされたが、この新たに自覚せる主体は、やがて自己本位に見、考え、行うに至るのである。かくしてその主体が自我的となるが故に、そこに新たな対立抗争が起つて来ることとなり、そのことより人間に対する新たな圧迫が生じて来る。かくてこの圧迫より人間が解放されること、新たな時代の課題となる。この課題は更に新たな主体の自覚によって解決されるが、この新たな主体は、やがて自我的となり自己本位に行動することとなる。そこに人間が新たな圧迫の下に置かれる。かくして圧迫の発生とそ

れからの新たな自覚による解放とが繰り返されて、人間の歴史が進展して行く。このことによって後なる解放は前の解放を止揚して解放は更に徹底し行くと共に、後なる自覚は前の自覚を前提としこれを止揚することによって自覚は更に徹底し行くのである。この人間の世界に全般的に見られるものが、経済世界についても見られるのである。

先ず原始社会に於ては、なお無力であった人間が自然等の暴力より圧迫されており、これよりの解放と云うことが当時の課題である。この課題は、血族共同体としての家族の団結力の自覚によって解決されるのである。かくて家族のな経済が支配的となる。この血族共同体としての主体的自覚は、その後古代を一貫せるものであった。日本の歴史について云えば、平安朝時代に至るまで、国家も天皇氏とそれに近親な氏族によって支配される氏族国家であり、経済は各氏族の荘園を基体として行われた。荘園は不輸不入を原則としてそれ自身が権力並に経済単位であったが故にそれは自己本位の主体となった。かかる荘園の集合としての社会は、やがてその全体の秩序を保ち得ざるに至る。かくて平安朝の末期に於いては、京都に於てすら白昼強盗が横行したのであって、かかる社会的秩序の混乱よりの解放と云うことが、当時の課題となるのである。西欧に於ては、原始共同体よりの発展としての諸民族の大移動による社会的秩序の混乱よりの解放が世界的課題となった。この混乱よりの解放と云うことは、新たな権力を自覚してこれに服従することによって解決されるのである。日本に於ては、鎌倉開幕により武力の長としての將軍並びに武士なるものが新たに自覚され、これに人々が服従することによって新たな中世的秩序が成立発展して行つたのである。西欧に於ては、キリスト教の法主による教會的の秩序と神聖ローマ皇帝の支配による帝國主義的秩序によって新たに中世的な世界秩序が確立することとなった。かくて人間の経済的生活も、かかる全体主義的秩序の規制の下に営まれたのである。この全体主義的秩序の下にあって、商業の発達は封建領主による秩序よりも

広い國民的単位の秩序の安定を求るに至った。かくて十五世紀以来「國民」の自覚が高まって来たが、先ず「國民國家」なる新たな主体がキリスト教並びにローマ帝國の全体主義的な世界秩序より解放されるに至った。この國民國家に於ては、國王即國家として國王なるものの主体的自覚が支配しており、この國王が富國強兵をはかるための經濟政策が、重商主義と云われるものであった。仏蘭のルイ十四世の支配下に於いて行われたコルベールリズムなるものは、その代表的なものであった。やがて個人的な自覚が高まって来た市民がこの専政的君主を主体とする重商主義の國家干渉的經濟政策よりの解放を要求することが課題となり、これが個々人の利己的な自覚に基づくところの自発的實踐的な活動によって、解決された。かくて個々人の利己心を原理とし各人が自由に自発的に活動するところの個人主義社會なるものが實現した。スミスの『國富論』がこの解放のための學問的自覚であったことは、云うまでもない。この個人主義的社會に於ては、個々の利己心を原理とする自由な自発的活動によって生産手段が未曾有な發展をしたが、これを自己の利益のために利用する資本家階級なるものが發展し来り、その支配の下に無産者が圧迫されることとなった。この階級的圧迫より大衆を解放することを新たな時代の課題とし、無産者を階級的自覚に高め新たな階級的主体に結成すると云う階級的自覚の論理によってこの課題を解決する道を明らかにしたところのものが、マルクスであった。このマルクスの經濟學的自覚は、一九一七年に至って、ロシアに於て「一國社會主義革命」として實現した。この學問的自覚とその實踐的事実とによって、無産者階級を主体とする階級運動が各國に於て高まり来たり、国内的に國際的に平等化を原理とする諸種の事件が起つて来た。このロシア革命の指導者であったレーニンは、『帝國主義論』に於て、資本主義世界なるものは、資本主義的強國が弱國を植民地化し、強國はまた相互に對立抗争するところの帝國主義世界に發展して行くものであることを明らかにすると共に、更に

『國家と革命』に於て、社会主義革命の一國主義社会革命としての道を明らかにした。かくの如く今日の世界に於ては、資本主義も社会主義も國家的形態に於て激しく対立抗争している。故にこの世界に於て支配的に働いているものは、國家主義的自覚である。各國は互に國家的自覚を強化することによって自己を防衛し、更に自己の國際的利益を追求しつつあるのである。かくてこの世界は國家主義世界である。而も今日原爆的環境に於て各國が國家的自覚に基いて自國本位に対立抗争することは、全人類の壊滅を齎すことならざるを得ない。ここに今日の人類は一つの運命共同体に結ばれているのである。この人類世界が存立し發展し行かんがためには、今やそれを全滅せしめんとしているところの暴力より人類を解放しなければならぬ。このことが今日の世界史的課題である。この解放の課題を解決するためには、人間が更にその自覚を徹底せしめてこれまでの主体的自覚より更に徹底して世界的自覚にまで至らなければならぬのである。この世界的自覚こそ今日の世界史的課題を解決すべき新たな論理となるのである。

西田哲学に於ては、既に昭和十六年に、次の如く云われている。「十八世紀は個人的自覚の個人主義的時代であった。十九世紀は國家的自覚の國家主義時代即ち帝國主義的時代であった。併し今日は世界的自覚の世界史的時代に入ったのである。如何にして新しい世界を構成するかが、今日の世界の課題である。……今日は真に全世界が一つの世界的空間となったのである。……我々は単なる対立的國家の理念を越えて、新たな世界構成の理念の上に立たなければならぬ。」また「今日は歴史發展の結果、単に自己自身によってのみ生きることができない。我々人間が真に人間的生命の本質として歴史的使命を自覚すべき時が来たのである。」と云われている。

かく創造的世界經濟学の立場に立つて見れば、これまでの人類史は「我」の自覚闘争の歴史であったと共に經濟

は「我」を主体とする経済であった。古代に於ては「いえ」が自覚され、人々は各々の「いえ」に内在し自己の家本位に「家我」の立場に立って経済し互に対立した。中世に於て人々が对象的超越的なものを自覚したと云うことは、この「对象的我」の立場に服従したのである。唯一人格神は自己本位に人間に対する「神我」であり人間はこれに絶対服従する。故にこの神は他の神に対しても自己本位に振舞う。かくて基督教のエホバの神と回教のアラーの神とは、十字軍の際に於けるが如く、互に対立抗争するものである。また同じ基督教においても新教の信徒と旧教の信徒とは神観を異にして互に対立抗争した。かくて西欧西亜の歴史に於て最も激しい闘争と流血の惨は、宗教戦争によるものであった。三十年戦争に於ては、ドイツは全く荒廢したのである。かくて生産力も浪費された。かかる中世の对象的超越的な「神我」より人間が解放されて自己に帰る内在的となったところの近世は、人間の「自我」の闘争史である。それはスミスに於ては「個人我」であり、マルクスに至つては「階級我」であった。マルクスは有産者階級の自覚性を明らかにすると共に、これに対抗して無産者階級も自我的に自覚して立ち上らなければならぬことを説いた。階級闘争と云うことは、「階級我」と「階級我」との対立抗争である。かく個人が内在的自我的であり、従つてかかる個人より成る各階級も内在的自我的であるところの今日の世界に於ては、これらの個人並びに階級より形成されているところの各国も、また各々内在的自我的たらざるを得ない。かくて各国は自國本位に「國家我」に立って対立抗争しているのである。今日の世界は、個々人も各階級も諸國家も内在的自我的に対立抗争している世界であり、経済もこれら自我的な主体による「我の経済」である。

然らば、如何にしてこれらの主体は「自我性」を超えることが出来るか。血族的な「いえ」において各個人は自我を超えて自己がそこに於て生かされている生命の場としての「いえ」となって見考え行っているのである。故に

それは共同體であつて、そこには「能力次第に働いて必要に応じて与えられる」と云う人間の經濟生活の最も具體的な共同體の原則が行われている。而もその成員が専ら自家本位に見考え行ふならば、それは「家我」の立場であつて家と家とが対立抗争することとなる。この人々が「家我」を越えて、各々の「いえ」がそれに於て生かされているところの生命の場としての「くに」へと内在的に超越しこの「くに」となつて見考え行ふとき、國は共同體となりそこには經濟の共同體の原則が國範圍に行われる。これが正しく國民共同體經濟と云わるべきものである。然しその成員が専ら自國本位に見考え行ふならば、それは「國我」の立場であつて、國と國とは対立抗争せざるを得ないこととなる。これが國家主義的世界である。この人々が「國我」を越えて各國がそれに於て生かされているところの生命の場としての世界へ内在的に超越するとき、この世界が共同體となるのである。かくて「能力次第に働いて必要に応じて与えられる」と云う、人間の經濟生活の最も具體的な共同體の原則は、世界の全体に亘つて行われる。この世界共同體に於ては各國は自己の自然富源をも全人類の爲めにこれを用いることとなる。例へば地球の六分の一のロシアの自然富源もアメリカのそれも、全人類の爲めに働かされ用いらなければならないのである。かく内在的に超越する一步一步は「人間革命」である。「人間革命」と云うことは、古い人間が新しい人間になることである。それは古い考え方の人間が、新しい考え方の人間となることである。この世界共同體に於ては、これまでのより狭い範圍に於て内在的だった人間が、これまでの内在性自我性を超へて、世界になつて見考え行ふに至るのである。

これまでの人間は、その度に新たに自覚された主体本位になつて見考え行ひ、經濟もして来たのである。「いえ」を自覚せるとき「いえ」本位になり、階級を自覚せるときは階級本位になり、國を自覚せるとき國本位になつて見

考え行い経済して来たのである。それは「家我」の立場の経済であり、また「階級我」の立場の経済であり、「国家我」の立場の経済であった。凡そ「我」の立場に立つと云うことは、その主体がそれにおいてあるところの生命の場である世界より自己を抽出し、この抽出された自己の立場より自己を抽出した世界を対象的に見るのである。本来世界に於てある自己を世界より抽出するとき、我も世界も抽象的とならざるを得ない。かかる我が主体となつて、自己本位にかかる世界を対象として見るとき、そこには世界の真相は現われ得ない。即ち世界は真に認識され得ない。この自我的主体が一度自我を否定するならば、自己はそのまま世界の中にあるものとして世界のものとして自覚される。自己は世界より作られるものであると共に世界を作るものであり、世界の自覚点であると共に形成点であることが自覚されるに至るのである。ここに自己と世界とは弁証法的に統一されているものとして自覚されるのである。即ち自我は自己否定即肯定として世界のものとなり世界の働きとなり、創造的世界の創造的人間として、また「天下の公器」として、自覚されるのである。自我を否定するときはじめて世界が自覚され、自己はこの世界の働きとして自覚されるに至るのであって、この世界自覚的自己に、はじめて世界はその真相を示すのである。かくてこの自己が世界を如実に識るに至ると共に世界の働きとして世界を作る実践主体となり得るのである。

かく人間史が自覚の徹底の歴史であったと云うことは、また自我を徹底する歴史であったと云うことが出来る。既に見たが如く、人間がこれまでそれぞれの自我の立場に立ったと云うことは、それが自己の生存にとつて必要であったからである。近世に至つて国家的自我の立場に立ったと云うことも、そうすることによつてはじめて生き得たからである。然し原子力時代の今日に於いては最早や「国家我」の立場に立つては生き得ないのである。これ原動力が国家間の戦争の意義を全く変革したからである。これまでの人類史は、自然的本能的な主体の歴史であった

が故に、この自我的本能的主体の間に暴力が用いられ常に戦争が行われかくて生産力が著しく浪費されたのである。故にこれまでの人類史は自我的本能的の歴史であつたと共に戦争の歴史であつた。然るに今や原子力時代に於てはこの戦争は全人類の破滅を意味することとなつたのである。故に人間が生きんとする以上、戦争を止めなければならぬこととなつた。従つて自我的主体の立場を越えなければならぬこととなつた。かくて今日人間が自我性を越え世界的に自覚すると云うことは、人間の利己心に矛盾することではなく、利己の心を自覚的に徹底することある。若し人間が、依然として自我に執着しているならば、自滅せざるを得ないのである。かくて今日人間が自我性を越え世界を自覚するに至ると云うことは、人類の必然的な発展方向である。それ故に世界は今日の帝國主義時代より世界共同体へと発展し行き、経済は世界共同体経済とならなければならぬのである。

四

マルタスの経済学の根柢に Philosophie und Geschichte 「哲学と歴史」の研究があつたことは、さきに述べたところであるが、このマルタスは、スミスを「偉大な歴史家」と云うている。またアリストテレスの『ポリテイカ』は、ギリシヤの百余の国家についての『アテナナイ人の国家』に於て見られるが如き歴史的研究の上に、立てられたのである。それはギリシヤについての世界史的な研究であつたと云うことが出来る。而もこれら三者に於ける歴史的研究は、当時の世界史的課題を解決せんとする実践的立場に立つてなされている。同時にこれらの人々は、優れた哲学者でもあつたのである。その後世界は、発展して今日はいつて地球の全面に拡大され一に結ばれた全世界となつたのである。今日の原子力時代の経済学は、この全世界を歴史的に研究する眞の世界史と、これを哲学する

眞の「世界哲学」との上に確立されなければならないのである。マルクスの『資本論』第一巻が出たのは、明治維新の前年にあたる一八六七年であつた。故にマルクス経済学の基礎となつた歴史的研究と哲学的研究は、今日の世界とは全く異なる旧い世界についてなされたところのものである。今日マルクスが生きていたとすれば、彼はこの新しい世界史の事実^に沈心してそこに新たな世界史の課題を把握し、これを解決すべく努力し、その爲めに今月の世界を世界史的に研究しまた哲学するであらう。この際、過去のマルクスの優れた哲学並びに歴史研究は、今日の世界哲学並びに世界史的研究の中に止揚されるのである。

かくて世界の進展と共に世界に関する研究も絶えず進展しなければならぬ。而して過去の優れた学問的研究は絶えず新たな時代の学問的研究の中に止揚されこれをより具体的に發展せしめることとなるのである。ここにこそ眞に創造的な学問的精神がある。

マルクスの時代の世界は、なお西欧本位の世界であつて、他はトインビーの所謂「土人」^{ネグロ}として見られていたのである。かくてマルクスにとつての世界はなお西洋的な世界であつた。然るに例えば河上肇先生は、西欧留学中に書かれた『祖国を顧みて』に於て、西洋文化の形成力に対し東洋ことに日本文化の形成力を比較し、その各の性格を人間関係に至るまで考察し居られるのであるが、マルクスの世界には、この東洋なるものが欠如している。かかる一面的な世界に立脚しているところのマルクス学の中に、今日の世界史の課題もこれを解決する論理も求めることは出来ないのである。ことに第二次大戦以後の今日の世界に於ては、本来西亜的文化圏より育成され、マルクス主義によつて新たに建国されたロシアが、アメリカをも凌駕せんとする勢にあり、東亜に於ける中共は、六億の民を有する大國として新興の意気に燃えている。これと共にこれまで西欧諸國の植民地であつたアジア・アフリカの

諸國は、殆んど獨立した。かくてそこには人類の古典文化時代以来、それぞれの文化圏を形成し來つた諸の形成力が、今や新大世界の形成に参加して働いている。かくて全世界は眞に全世界となつたのである。故にこの全世界の諸文化的形成力を明らかにすることによつてはじめて今日の世界の課題を解決する論理を明らかにし得るのである。全世界に於ける根源的な文化的形成力としては、儒教ことに仏教によつて代表される東亜の内在的超越的な形成力と、ユダヤ教後に回教によつて代表される西亞の對象的超越的な全体主義的な形成力と、ギリシヤ文化後に西歐文明によつて代表される西歐の内在的な個人主義的な形成力とが區別される。これらの相異なる文化形成力は、根源的な、具體的な、人間的、形成力が異なる環境に於て一面的に發展したものであり、異なる地理的狀況に於て成立した異なる基礎産業に於ける異なる人間的關係に基礎付けられてゐるものである。今やこれらの諸文化的形成力が一つの世界的空間に於て互に接觸會通して具體的な人間的形成力の形成に進みつつある。而してこの具體的な人間的形成力こそが、今日新たな世界を形成するところの形成力なのである。故に今日の世界史的課題を解決せんが爲めには、世界文化史が、かかる全人類的立場に立つて研究されねばならないのである。

かくてまさに経済学の課題と論理を世界の時代的發展的構造との關係に於て見た私は、ここにはその論理を世界の諸文化圏との關係に於て見ることとする。

中世の對象的超越的なものの支配する全体主義的世界よりその下に圧迫されていた個々人を解放し内在的に自由にする経済学を確立したスミスは、英國人であつた。英國人は西歐の中に於ても最も個人主義的な國民であつて、近世の議會主義的政体を早くより發展せしめ完成せしめたのも英國人であつた。また産業革命を大陸の西歐諸國に先立って進展せしめ世界の資本主義的發展の先頭に立つてこれを指導したのも英國人であつた。この英國がスミス

を生んだと云うことは、正に英國の世界史的地位に合致するものである。かくて英國文化は個々人を内在的に自由化し又は民主化して近世の世界を進展せしむる原動力となつたのである。

スミス並にスミスにつづく英國の古典經濟學なるものは、総て、この個人的に内在するところの利己心なるものの働きに信頼したのであって、各人が自己の利益を追求するならば、自ら公益が実現すると云う信念に立脚した。

既に述べたが如く、スミスにとつての歴史的課題は個々人を内在的に自由化し又は民主化することであつたが、かくして不平等になつて来た經濟社會を平等化することを、新たに時代の經濟學の課題とし、これを新論理によつて解決したものは、ユダヤ人マルクスであつた。ユダヤ人には二つの型が区別され得る。一つはイザヤ、エレミア、キリスト等旧約聖書に見られる予言者型である。他はキリストによつて神殿より追ひ払らわれる商人であり、またシエクスピアの『ヴェニス商人』に於ける高利貸シャイロックの如き高利貸型である。マルクスが『独仏年誌』において、市民社會を批判して、貨幣を神とするユダヤ教であり「唯物主義」であるとするとする時、この商人型のユダヤ人を意味するのである。この唯物主義的社會を人間の社會へ変革せんことを叫ぶ彼自身は、正に予言者型のユダヤ人である。総ての人間を等しく神の創造物であるとして當時の不平等化する社會を変革せんとして叫んだ旧約聖書のイザヤ、エレミア等の予言者の人間平等の精神は、正にこのマルクスに於て見られるのである。唯だ旧約聖書の予言者とマルクスの異るところは、神そのものを否定したことである。ヘーゲルの『歴史哲學』に於ては神は自己の計畫を世界史的事實として實現しこれを通じて自己を理解することによつて尚世界史の最高原理として保持されているが、フォイエルバッハは『基督教の本質』に於て神を人間の作つたものとして否定した。ヘーゲル左派よりフォイエルバッハの唯物論を通じて自己の哲學的立場を確立した青年マルクスに於ては、この神なる

ものは否定されている。而も神の代言者としての予言者が人間を平等なものとしこれを平等せんとする、ユダヤ精神はマルクスの根本的な精神となつてゐるのであつて、彼は不平等の社会を平等化せんとすることを以て生涯の課題として、これに一切の研究を集中しこれに一切を捧げ尽したのである。かくて彼の一生の原動力となり彼の一生を貫徹したところのものは、この平等化の精神であつた。彼は云わば平等化の精神の権化である。而してこの平等化のための手段として、無産者独裁をも是認するのである。これは個人の自由を重んずる西欧的な文化圏の形成力とは全く相容れないものである。かくてマルクス主義が実現されたのも、西欧の文化圏ではなく、本来全体主義的な西亜の文化との関連によつて作られ政教一致のツア一の専制主義の下に發展し来たところのロシアに於てであり、そこに共産党の独裁、スターリン独裁も実現したのである。この独裁の是認は、個々人の内在的な自由をそれ自身目的として尊重する西欧主義とは相反するものであるが故に、ここにアメリカを首領とする西欧の自由国家群と社会主義ロシアの相容れない根本的なものが見られるのである。個人的自由主義の立場に立つものは、この独裁を中世的な全体主義と同一視するのであるが、それはマルクスの平等精神を無視するものである。マルクスの目的とするところは、どこまでも人間関係の平等化であつて、独裁はこのための手段として是認するのである。

かく西欧と西亜の文化圏に成れる論理は既に経済学を作つたが、今日は東亜文化圏に成れる論理が明にされ、これが西欧西亜の論理を止揚することにより全人類の論理を明かにし、これにより全人類の世界を形成する真に世界的な経済学が作られねばならないのである。故に東亜文化圏とそこに成れる論理について幾分考へて見よう。

先ず他の文化圏について一言すれば、西亜は酷熱の砂漠地帯であつて遊牧の民がオアシスを求めて鬭争せざるを得なかつた。かくて人間関係は、全体主義的となりそこに全体主義的なユダヤ教回教等が發展し对象的超越的な論

理が成立した。西欧の自然は、雨量も光熱も東亜に比すれば遙に少なく、それは牧草地帯である。従つてそこには牧畜が基礎産業となった。これにあつては人間関係は遙に自由であり、ギリシヤ以来個人の合理的文化が発達し、その論理は内在的なものである。

然るに東亜はモンスーン地帯であつて、太陽の光熱と雨量に恵まれこと極めて大であり、水田耕作が普及している。水田耕作は灌漑等のために広範囲にわたる共同労働を必要とする。故にこの地帯に於ては、人間の本来的な在り方としての原始共同体の形態が村落共同体として保持されている。かくて中国より印度に至る東亜圏に於ては、人口の大部分が村落に定着して農耕に従事して居り、血族的な家の拡大としての村落共同体の生活が人間関係の基本的な構造を成している。

村落共同体なるものは血族的な家の拡大されたものであるが、家に於ては、前述せし如く、内在的超越的なものを見方考え方即ち論理が行われているのである。故にこの東亜より生れたところの世界的文化は、この「いえ」の内在的超越的な論理を純化拡充したところのものである。儒教は「修身、齊家、治國、平天下」を實踐せんとする教えであつて暴力による覇道を否定して王道の政治を主張するものである。故に今日マルキシズムも中国に於て毛沢東等により儒教化され王道化され人間の自覚教育を重じて、ロシアに於ける暴力主義全体主義とは異なつた進展をなしつつある。仏教は東亜の内在的超越的な論理を最も純化徹底せるもので、そこに於ては人間は「我」の迷を覺つて自我を否定して一切を包んで生かす絶対の慈悲の働きとなって生きるのである。かくて内在的超越的な東亜の文化は、世界史の内在的超越的な時代としての古代を代表するところの文化であるが、それは今日の世界にとって再び大きな意義を有するに至つたのである。今日「我」の対立抗争による暴力に行き詰まれる西洋文明の形成力は、

この東亜の内在的超越的な形成力によって媒介されることによって始めて、新たな全人類的世界の形成力に高められるのである。かくして経済的にも、全人類が「能力次第に働いて必要に応じて与えられる」ところの全人類の経済共同体が実現され得るに至るのである。今日印度のネールがアメリカを先頭とする自由國家群に対して、中國の毛沢東がソ連を先頭とする社會主義國家群並にアジア・アフリカに対して、最も大きな発言力を有することは、一見奇なるが如くにして偶然ではないのである。これ東亜の内在的超越な論理の意義を、今や世界が新らたに自覚しつつあるからである。

而も今日の世界的課題は、単に内在的超越的な論理によって解決され得るものではなく、この立場より西歐の内在的自発的実践的な論理をも西亜の對象的超越的な論理をも止揚したところの最も具体的な人間論、理又は全人類論の論理によって始めて解決し得るのである。故にこれを経済学について云えば、自由化の西歐的経済学を止揚して平等化の西亜的経済学が成立したが如く、この両経済学を東亜の内在的超越的な論理の立場より止揚することによって、はじめて世界的、全人類的な経済学が成立するに至るのである。

然らばかかる経済学の成立に最も適当な文化場は、内在的超越的な東亜文化を土台とし、その上に自由化の西歐的文化と平等化の西亜的経済学とが既に撰取されている日本の文化場である。欧米並びに西亜には内在的超越的な文化が欠如しており、東亜諸國には西歐の文化が日本に於けるほど学問的までには撰取されていない。只だ日本のみは、早くから東亜の内在的超越的な文化を撰取して身につけ、明治維新以来は欧米の文明並びに経済学を受け入れて欧米諸國と対等な地位にまで高まり得た只一の國であるが、更に第一次大戦後に於ては河上肇先生を指導者としてマルクス主義経済学が撰取され世界でも稀なマルクス主義研究國となった。而も河上肇先生は、早く東亜の内在

的超越的論理により「天下の公器」としての自覚に立つて、古典学派、人道学派、マルクス学派等の経済学の研究に没頭し、遂にマルクス主義の實踐に立たれた。かくて河上先生に於ては、東亜の内在的超越的論理が経済学とはじめて実践的に統一されたのである。更に西田幾多郎先生に於ては、東亜の内在的超越的論理を根底として他の論理が止揚されて具体的な人間の論理としての創造的世界の論理がはじめて確立されたのである。かくて今日の日本に於て世界史的課題を解決すべき具体的論理は準備されたのである。かくて両先覚者の偉大な學問的精神に學んで、全人類的な世界経済学を確立することが、今や日本の経済学者の世界史的使命となったのである。

五

この「創造的世界経済学序説」を終るに当り、以上述べ来たところを要約することによって、創造的世界経済学なるものの性格を、一応明らかにして置き度いと思う。創造的世界経済学は、既に述べた如く、中世の全体主義的圧迫より解放されて自発的實踐的となれる近世的主体が自我的であるが故に暴力的に対立抗争することによって行き詰まれる今日の世界を博愛的な世界に變革せんとするものである。即ち今や暴力よりの解放と云うことが世界史的課題であり真の平和な世界が實現されなければならないのである。この立場に立つて人類歴史をかえりみると、人類歴史は暴力的闘争の歴史であった。而も戦争手段は経済的生産手段と同様に道具と人力より機械と物理力に進んだ。この機械は飛行機等に而して物理力は遂に原子力にまで発達した。かくて各国家の巨大な財政支出の大部分は戦争の為に用いられることとなった。アメリカの予算に於て巨大な支出の六割四分は戦争の為に而して福祉の為に僅か二割が当てられている。一度戦争が起れば、その破壊力は人類と人類文化の一切を破壊し尽さ

ずにはおかない勢にある。この戦争を防止する為めと云われている戦争準備の為に、今日全世界の生産力の大部分が浪費されつつあるのである。マルクスは、資本主義社会を批判して、相團結して自然に對し最小の勞費をもつて經濟を営むべき人類が、階級的闘争の為に生産力を無用に浪費しているとして、この階級闘争のない合理化された經濟を土台としその上に人間的能力が十分に發揮せられることを以て彼の「人間の社会」であるとするとするところの「自由の国」の構造を考えたのであるが、その後戦争技術が著しく發達した今日の世界に於ては、人類の生産力を浪費しつつあること最も大なるものは、戦争である。毛沢東は『矛盾論』に於て、主たる矛盾と従たる矛盾を區別し主たる矛盾の解決が他の矛盾を解決するに至ることを述べているが、戦争こそが今日の世界の主たる矛盾である。我々はこの矛盾の解決を第一とすると、他の矛盾も解決されることとなるのである。今日の世界の解決すべき課題は広く「我」の對立抗争の矛盾である。国家間の戦争は國家我の對立抗争であり、階級闘争は階級我の對立抗争であり、その手段として暴力が用いられるのである。而も戦争は屢々階級闘争の名に於て是認されるのである。有史以來常に戦争を當然の事として来た人類にとつて戦争技術が人類の破滅を意味するに至つた今日、はじめて戦争のない眞の平和の世界に生きることが絶対的必要となつたのである。この平和の世界に於てはじめて、人類の全生産力は全人類の眞に人間的な生活の為に活用され得るのである。最小の勞費を以て最大の效用と云う經濟原則も、ここに至つてはじめて人類が全体として實現し得るに至るのである。

而もこの今日の世界的矛盾は主体の自我性に根ざせるものであるが故に、人間が自我を越えて世界になつて見考へ行ふに至らない限り、これを根本的に解決することは出来ないのである。この見方考へ方が内在的超越の論理であり、「天下の公益」の論理であり超包的論理であり、また自我を否定して世界の働きとなつて働くところの不

定即肯定の論理である。これまで自我本位に生きた人間が、自我を超えることによつて、自己がそこに於て生かされてゐる生命の場としての世界を自覚し、この世界になつて見考え行い世界の働きとなるのである。かくてこれまでの主体的論理が場所的論理にコペルニクスの転換をなすのである。而もかくの如き内在的超越の論理は、これまで経済学がそこに成立したところの文化圏にはなかつたのであつて、それは根本に於て東亜の大乗仏教の論理が明らかにしたところのものである。この大乘の論理が西歐の自発的実践的な主体の論理を止揚するとき、ここにはじめて全人類の最も具体的な論理が確立し得るのである。この全人類の論理をもつてこそ、全人類的な「人間の世界」が形成されるのである。この人類の共同体於て「能力次第に働き必要に応じて与えられる」と云う、人間の最も具体的な経済生活の原理、そしてこれこそが経済的な博愛の原則であるが、全人類的範囲に亘つて実現し得るに至るのである。この原則が実現された世界こそ経済的にも博愛の世界であつて、眞の平和な世界である。

かかる世界共同体に至るためには、先づ各岡が岡内に於て、国民の各人が「能力次第に働いて必要に応じて与えられる」博愛的な経済原則を実現しなければならぬ。而もこのためには、各人は「自我」を超え、「家我」を越えて、國になつて見考え行うに至らなければならぬ。かくして國民共同体が実現されるに至るのである。各人が自我的に自己の利益本位に経済的に行動することを原理としてゐることは、所謂ケインズ革命を実現しつつある今日のアメリカに於ても変らない。故に資本主義國家も、かかる國民共同体に向つて変革し行くことを國家の経済政策の最高の指導原理としなければならぬ。今日の世界の資本主義諸國は、シュムペーターの云へる如く事実その方向に進みつつあるのであるが、然しこれを世界共同体への過渡期として自覚し、自覚的にその方向へ進展せしめることが必要である。社会主義諸國と雖も、自國を常に世界共同体の成員になるべきものとして自覚していなければ

ば、ソヴェト・ロシアに於て見られたが如く、自国本位に陥ることとなるのである。自国本位の行動を世界本位の行動に發展せしめて、はじめて世界共同体の一員となり得るのである。

かくて世界の各國民は、社会主義國家たると資本主義國家たると新興國たるとに拘らず、世界共同体實現の自覺を基礎として自國を共同体的に形成しながら世界共同体の實現に協力しなければならぬ。而して各國が共同体化する程、これを成員とする世界は一層共同体化し、世界が共同体化する程、これを基礎として各國は一層具体的に共同体化することとなる。かくて國民共同体と世界共同体とは相互に働き合ふて愈々具體的な共同体となつて行く。そこには自然的本能的な國家間の対立も自然的本能的な階級間の対立もあり得ないこととなるのである。

かくて世界共同体はかかる「人間革命」と共にこれに相應する「環境革命」によつて實現して行く。この共同体に於ては、これまで人類の生産力を浪費し破壊し人間の精神を苦しめたところの戦争と共に階級闘争もなくなくなるから、全人類の自由な自發的な主体の活動は經濟的生産力の総てを平等に全人類の人間の生活の向上と發展との爲めに用いるところの各國並に世界の經濟計画を立て、これを自由な自發的な主体の活動によつて實現し、この經濟的基礎の上に総べての人々が「それ自身目的としての人間的能力」であるところの眞善美聖の價值意識を十分に養ひ、これらの価値を創造し享受し得るに至るのである。かくてそれは、自由・平等・博愛の世界であり、眞善美聖の世界である。スミスの經濟学は自由の經濟学であり、マルクスの經濟学は平等の經濟学であつたが、この新たな世界を實現するところの經濟学は、自由・平等・博愛の世界經濟学である。

以上の序説を前提として、經濟哲学、世界經濟思想史、並に經濟学の諸部門が確立されねばならない。

(1) 西田幾多郎全集別卷六補遺第七頁。

(2) 同第二〇頁。